令和 4 年 11 月 29 日

学位請求論文（課程博士）審査報告

学位請求論文：　ネパール人日本語学習者の日本語音声の習得の特徴

―ネパール語に着目して―

学位請求者　：　文学研究科博士後期課程　　引田　梨菜

審査委員

主査　国際コミュニケーション学部教授　　王　伸子　㊞

副査　国際コミュニケーション学部教授　　高橋雄一　㊞

副査　国際コミュニケーション学部准教授　阿部貴人　㊞

審査報告

本学位請求論文は、日本語教育の領域のうち、学習者とその背景に着目し、まだほとんど着目されていないネパール国内の状況とネパール語の構造を分析対象とした、新規性の認められる論文である。本論文の構成は、全部で 8 章からなるが、最初に本論文の着想に至った内容と先行研究について述べたのち、ネパール人学習者とその背景、教育状況について、現地での調査結果による分析を含め、丁寧に論を展開している。さらに、ネパールにおける教育の状況と日本語教育について現代の状況を述べながら、日本への留学の意味についても言及している。さらに、ネパール語の、言語の構造について分析しつつ、文法の特徴、音声の特徴に焦点を当て、この言語を母語とする学習者が日本語を学習した場合の正負の干渉等について明らかにしながら、日本語との対照研究を試みている。そして、最終的にはネパール人学習者の今後の動向と、日本国内における状況等の将来的な動向について分析を試みている。さらに、日本語との対照研究を試みながら、ネパール人学習者が日本語学習に親しみを感じる要素の一つとして、日本語の五十音の存在を上げている。さらに、そこから

史的音韻論と、日本語の音素の構成に貢献しているであろうデーヴァナーガリーの存在に切り込み、日本語学の領域では、現在、あまり研究が深められていない悉曇の日本語における位置づけにも言及し、それを日本語学習の教材の一つとして利用する可能性についても述べている。

この論文の特徴であるが、まず、対象とする学習者の言語と環境に着目して、独自の分け方を設定している。一般的に言語教育の領域では、学習者を対象とする時、何語の母語話者かということから論を始めるのだが、本研究では、ネパール語を母語とすること自体の断定が難しく、どの言語が本当の母語かと設定するよりも、ネパール人と設定し、その背景を細かく述べることに意味があるということで、これも、ネパールという国の特殊性を明らかにした設定だと言えよう。

さらに、現地での数か月に及ぶ調査も貴重な資料であり、これまでにはない論文になっていると言えよう。当初は、もう少し調査を重ねる予定であったということだが、コロナ禍のため、ネパールへの入国も制限され、渡航も難しい状況であったので、それを日本国内のネパール人の調査に切り替え、国内での調査に予定以上に力を入れることになったということである。そのかいあって、教育とその背景についてのよい聴き取り調査ができている。

また、日本語との対照研究の部分では、日本の文字は漢字文化だという以前に、発音としてはデーヴァナーガリーの影響が強いということに改めて光を当てた論考だと言える。日本語教育の入門段階で導入することになる五十音についての知識は、ネパール人学習者のためだけでなく、五十音を学ぶすべての学習者のためにも有用に違いない。

総合的なまとめとして、言語の四技能のうち、聞く・話すといった音声が介入する運用能力に長けているとみられるネパール人学習者は、それまでの教育的背景と、言語の状況から、音声的運用能力が高いということが証明できるが、一方、学習教材や辞書等の整備が不十分な環境のため、文字や語彙の学習が不足しているという状況も明らかにされている。こうしたことから、今後、どのような点について言語教育の支援が必要であるかということも、明らかにされており、ネパールにおける日本語教育の今後と支援を考えていく展望も描かれている、成長をさらに期待できる論文であると認めることができる。

以上の点について、主査、副査ともに本論文の意義を評価し、今後も研究と教育を続けていくという点についても高く評価できるとし、博士号に値する論文であると評価する。

以上